

産学共同研究「ともに学ぶプロジェクト」コミュニケーション支援ソフト「きもち日記」が2018年度グッドデザイン賞を受賞

インクルーシブ教育に向けた ICT 利活用の産学共同研究「ともに学ぶプロジェクト」の成果で開発された「FUJITSU 文教ソリューション K-12 コミュニケーション支援 きもち日記」が、「2018 年度グッドデザインアワード」において「グッドデザイン賞」を香川県教育委員会、小豆島町教育委員会、富士通株

式会社と富士通デザイン株式会社と共に受賞しました。受賞した「きもち日記」は、発達障がいや知的障がいなどがある子どもたちが、5W1Hの日記形式で、気持ちや経験を自分自身で表出・文章表現することを支援するソフトウェアであり、共同研究を経て富士通より製品化されたものです。



工学研究科博士後期課程2年の柴田慶一郎さんが、第53回地盤工学研究発表会優秀論文発表者賞を受賞

地盤工学会は、日本において地盤工学を担う専門家の集まりであり、年に一度開催される研究発表会をはじめ各種シンポジウムで論文発表がなされています。優秀論文発表者賞は若手発表者が対象とされており今年度の大会では574名が審査の対象者にあたりました。その中で柴田さんを含め149名が受賞してい

ます。柴田さんは、地盤環境—その他のセクションにおいて「模擬フレコンバッグ中の汚染土からのセシウム抽出と吸着に関する研究」という表題で口頭発表を行いました。その発表、内容が評価され今回の受賞にいたりました。地盤工学会ウェブサイト、及び地盤工学会誌（2018年11・12月号）に受賞者

リストが掲載され、2019年6月開催予定の第61回通常総会において、受賞者氏名が報告されます。



上田夏生教授(医学部長)が2018年度日本ビタミン学会 学会賞を受賞

11月4日、大阪医科大学で行われた授賞式および受賞講演で表彰を受けました。本賞は、公益社団法人日本ビタミン学会により、我が国におけるビタミン学の進歩発展に功績のあった本会正会員である研究者に授与される賞です。受賞研究題目は、「必須脂肪酸由来

の生理活性脂質と関連脂質分子に関する酵素的な研究」です。



剣道部が「第51回全国教育系大学学生剣道大会・男子団体戦」で初優勝

この大会は、毎年7月上旬にオリンピック記念青少年総合センターで開催され、将来、教師・教育者を目指す国公立の全国教育系大学から、約300名の大学剣道部員が参加して盛大に行われています。香川大学は、昭和60年から男女ともに参加し、これまでに男子は

2回、3位に入賞。今年度33回目の出場で、初優勝の栄冠を手にしました。11月12日、剣道部の功績を称え学長表彰式が行われました。学長から表彰盾が授与されるとともに、表彰式後の懇談では更なる活躍への激励の言葉が贈られました。



香川大学では今後、全学でデザイン思考教育を取り入れていきます。ところで「デザイン」とは何でしょう？ そんな疑問に、創造工学部創造工学科造形・メディアデザインコース10人の先生方に、「デザイン」と「お一人ずつ決められたテーマ」をかけて、語っていただきました。(2回目/10シリーズ)

DESIGN × COMMUNICATION

創造工学部創造工学科造形・メディアデザインコース講師

柴田悠基

今回は Design x Communication と題して、これからの時代を担う世代と彼らを育てていく世代に向けてコミュニケーションについてお話させていただきます。コミュニケーションの概念が世代間で変化しつつあることを、旧世代・新世代の両者が認識し歩み寄るための参考になればと考えています。

1980年生まれの私は「飲みニケーション」という言葉が通じる最後の世代であると言っていいだろう。この言葉を知らない「新人類」(注1)の方に説明すると、「コミュニケーション」と「酒を飲むこと」が合体した造語であり、主に職場の終業後に開催される職場の人間同士での飲み会のことを指している。私が学生だったのは2000年付近で、その頃にはすでにオヤジギャクとして扱われ、当時の20代からは揶揄する言葉として使われていた。1990年代バブル崩壊から失われた10年の間にその言葉が少しずつ社会から消滅していった記憶がある。ここ10年程、経団連が行う新卒採用に関するアンケートで新卒採用に求める条件1位は、コミュニケーション能力だ。この結果に対して憤慨する学生も少なくないだろう。学生らは当然友達と話すし、LINEで休講情報やサークルの連絡事項をやり取りしている。社会に出ても上司とコミュニケーションを取る姿勢は意識しているはずだ。むしろ、コミュニケーションの頻度や手法は昔より多く複雑になっているかもしれない。しかし、社会は若者に対しコミュニケーション能力が不足していると感じている。なぜ社会は若者にコミュニケーション力を要求しているのだろうか。

この違和感を紐解くために、文化人類学者ヴィクター・ターナーの「コムニタス」を参照しよう。コムニタスとは「日常的な秩序が逆転・解体した非日常的な社会状態であり、無礼講やカーニバルなどの祭礼や、一揆などの社会運動のことを指す。(中略) また、宗教学的立場から、自然的存在として生まれた人間が、特定の文化のなかで、多くの儀礼を通過することによって、その文化における宗教的人間の理想に近づくプロセスとみなした。」(注2) あるコミュニティにおいて日常として認識されている構造を逆転する行為のことを指しており、社会構造としての上下関係を定期的に逆転するまたは平等にすることで構造の硬直化を防ぐ役割を持っていることだ。職場での「飲みニケーション」は無礼講という平等を採用したコムニタス的作用を組織に与える2000年代まで続いた祭礼

と捉えることができる。

おそらく多くの若い世代にはこの参照はピンと来ないはずである。コムニタスはあるコミュニティ内での祭礼や通過儀礼を指している。すなわち、企業での祭礼をコムニタスと捉えるためには、企業をコミュニティや共同体として認識する必要があるということだ。1990年初頭から2000年初頭の就職氷河期と呼ばれた10年間で契約社員は増加し、終身雇用という考え方も難しくなってきた。企業が社員の人生を最後まで責任を持つという時代ではなくなってしまっている。企業がコミュニティとして機能していないケースが増えているのだ。

一方で、阪神淡路大震災(1995年)、東日本大震災(2011年)により、地方自治体をはじめとした社会全体でコミュニティ再興の動きが活発に行われ、コムニタスとしての祭りやアートプロジェクトなどのイベントが多く行われている。

世代間のコミュニティ認識で苦しむ企業は、震災復興で今なお続くコミュニティ再興の活動を参考に新たなコミュニティの形成を試みることは手段のひとつになるかもしれない。また、若い世代の皆さんは普遍的と思われた様式も時代によって意味が変わること、そして、その変化を敏感に感じ取る感性を磨き、みなさんにとってより良い未来を作る糧にしてもらいたい。

今回はコミュニケーションが持つ世代間の違いについて、文化人類学的視点から考察したが、メディア・デザイン、空間設計、情報機器などさまざまな分野から、この課題に取り組むことが可能である。

創造工学部では、このような問題の本質を見極め、多様な思考方法と手段で解決するために、チームワーキング演習やロジカル思考演習、デザイン思考演習をはじめとしたDRI教育(注3)による教育を行っています。

注1 1980年代の新語、現代では死語。従来とは異なる価値観を持つ世代の総称。
注2 出典：世界大百科事典第2版 平凡社
注3 Design Thinking, Risk Management, Informatics の頭文字を取った教育。次世代工学系人材に必要な素養として創造工学部の基礎教育に取り入れられている。